

# 水がびんびん







ジブリの森のえいが

# 水が珠々ん

原作・脚本・監督：宮崎 駿

音楽：山瀬理桜

演出アニメーター：田中敦子

制作：スタジオジブリ

スタジオジブリ・マンマユート団 提携作品

上映時間：14分54秒

© 2006 ニッポン・MG

## ごあいさつ

小学校の教室で、先生がクモには目が八個あって、ハエトリグモの頭を顕微鏡で覗くと、真っ黒な毛だらけの頭に赤い目玉が八個ならんでいて、とてもきれいなんだと話してくれました。同じ頃水の中にすむクモが出てくるマンガを見ました。水草の葉裏に空気の泡をくっつけて、その中に住んでいるなんて、おもしろいなあと思ったのですが、残念ながらぼくは昆虫学者になる素質はなかったようで、それきりでおわりました。

美術館の「トロピョんびョん」の部屋に、パノラマボックスを作る時、水中の世界もぜひ一個ほしいと思いました。もともと水の中を覗くのが好きでした。澄んだ流れや池の中を見ていると、高いビルの上から下界を見下ろしているような気がしてきます。そこに小さいいきものの姿を見かけると、なおドキドキします。ヒルがはっていたり、透明なエビが無



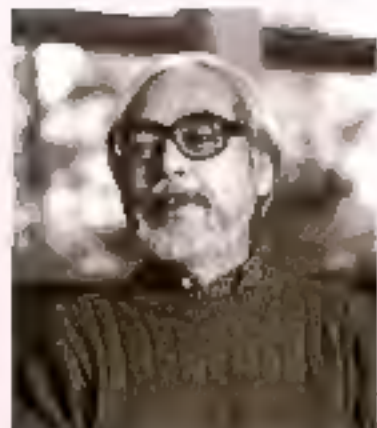
重力状態の宇宙船のように動いたり、ザリガニなんてなんと良く出来ているのでしょうか。沢山の手の先がみんなツメになって動いているのを発見した時は、息を呑むってこれだなと思うくらい感動した記憶があります。

水の中の小さいいきもの連には、世界はどう見えているのでしょうか。空気の泡も、ぼくら人間が感じるよりももっと弾力があるはずだし、重さそのものがほとんどない宇宙みたいな所のはずです。

そんなことがあるので、泡の中に水グモがいるパノラマを作って、題も思いつくまま「水グモもんもん」とその場で決めました。スタッフがザリガニやカエルや、奥のほうに大きなメダカなんかを丁寧に良く描いてくれたので、今でも「水グモもんもん」は子供連の人気の的でした。息をつめて、箱の中をじっと見つめている子供連を見ると、ぼくは思わずニンマリしてしまいます。

ところが、実際の水グモの生態とは違っていたんです。ぼくはいつものクセでうろ覚えで描いちゃうから、絵が出来てから、いろんな資料が現れたり、本が届けられたりして、後のまつりになるんです。

水グモはお尻の下の方に息をする気門があってお尻に空気の泡をつけて、アクアラングのように水中で息をしているのです。お尻に泡がくっつくと、簡単にはとれないんですね。その泡を水草の葉裏に糸でくくりつけて、また水面にのぼってお尻に泡をくっつけて来て、少しずつ大きくします。身体全体が入れる大きさになると、巣は出来上がり。その中



## 宮崎 駿

でエサを食べたり、お尻だけつっこんでおいて、頭は水の中に出してエサを狙ったりします。

パノラマボックスの絵は、子供達が気に入ってくれているので、なおすのはシャクです。そのうち、

いつかもんもんの映画を作ろうと思うようになりました。といっても、すぐ作り始められるわけではありません。時々思い出して、ちょっと考えたり、また頭の中の引き出しにしまったり、つまり、忘れたりするのです。

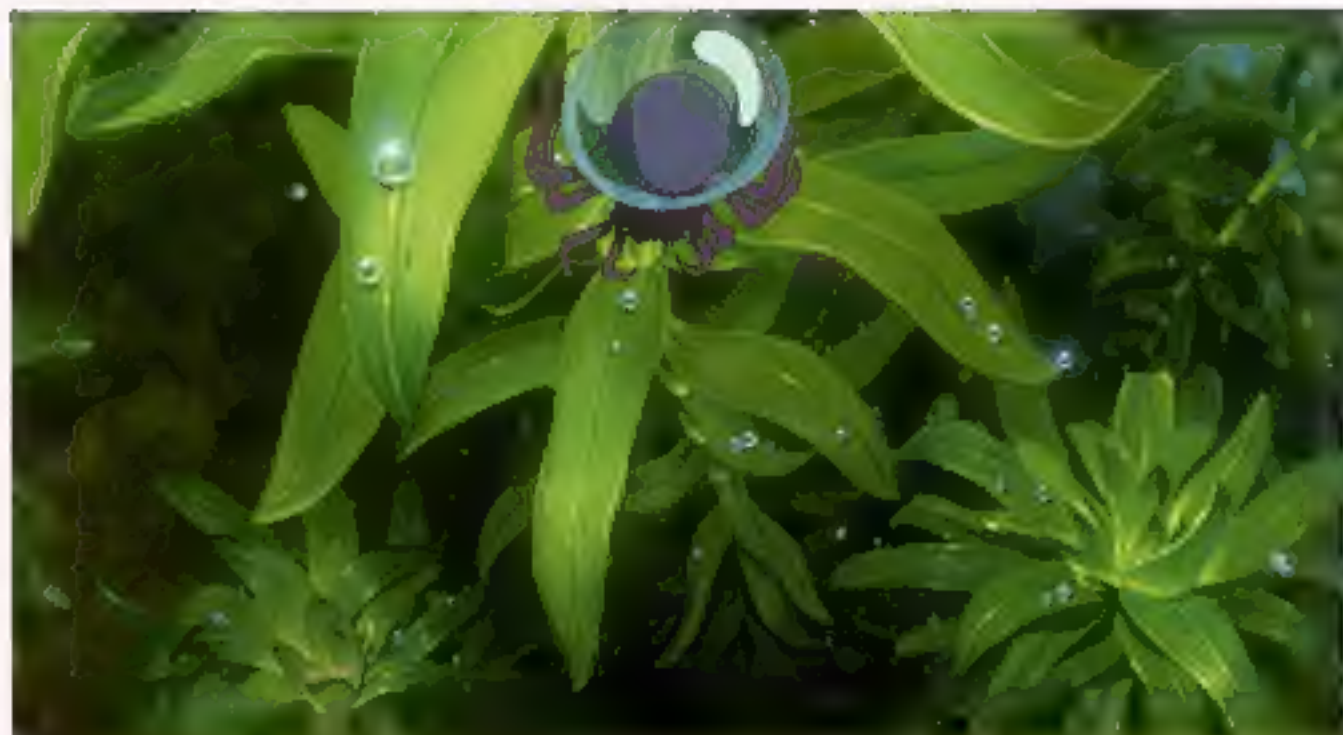
そうしているとふしぎなことにいろいろなものが目に入るようになります。ボンヤリ見ていたテレビの映像にヒントになるものがあったり、散歩の途中に、水辺にはえている植物の、水と空気のさかい目を覗いたり、バッタが水面におちたのに、またはねて脱出するのを見て、どうして沈まないのか、アレコレ考えたりするようになります。

引き出しに、いろんな形やようすが、少しずつたまっていくのです。

私達のくらしのまわりから、虫が少なくなりました。同時に虫が大キライな子供達が増えています。いえ、大人だってそうです。親がきらいなので子供達もキライになるのです。

どうか虫を好きにならなくても、触れなくてもいいですから、虫をキライにならないで下さい。

水グモの映画を作れてほくはとても幸運です。スタッフの努力に感謝すると共に、息をつめてパノラマボックスを覗いてくれた子供達が、この映画を実現させてくれたのだと思います。



## あらすじ

水グモもんもんにとって、光る水面は異世界との境界みたいなもので、もんもんは水面から粘りっこい空気をちぎり取って、水草が高層建築のように立ち並んでいる谷間へと運んでいく。水グモは水中を縦にだって歩くのだ。水草は巣を作る大切な隠れ場所。水の中は獲物を狙う捕食者の狩場で、トンボやゲンゴロウの幼虫達はティラノサウルスよりももっとこわいし、ザリガニは水草そのものをひきちぎってしまうし、大きな魚は水グモなんかひと飲みにしてしまう。

もんもんは、ひとりぼっちでオドオドとかくれながら、勤勉に生きている。そして、自分より小さくて弱いものなら、なんでもつかまえて喰ってしまう。

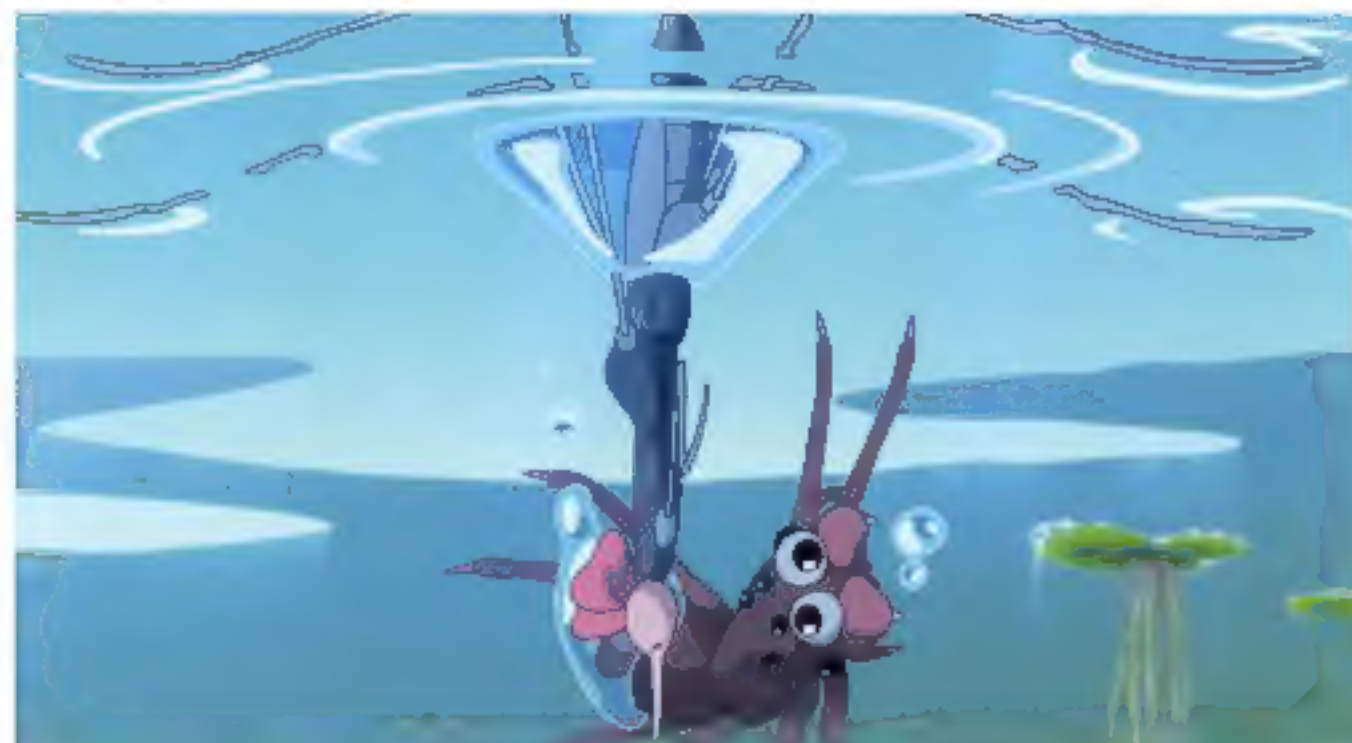
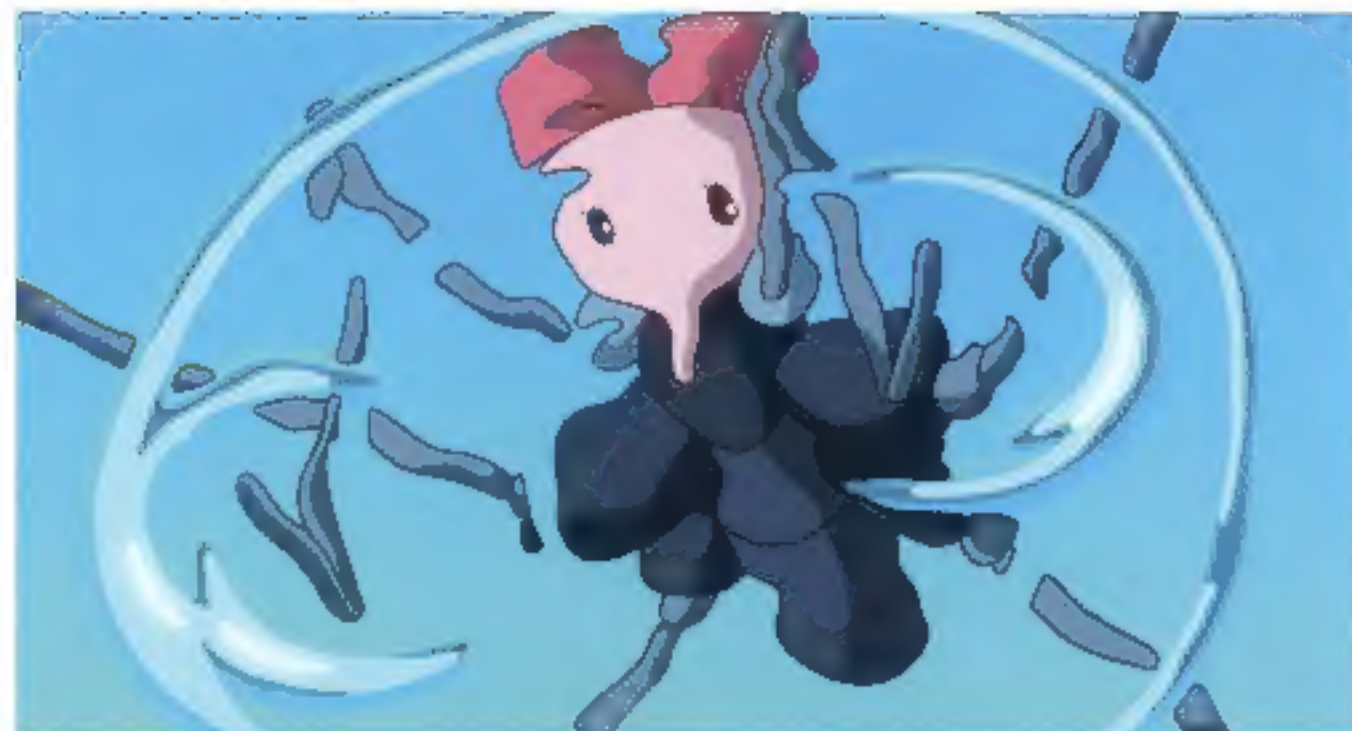
もんもんはある日、水面を自由に滑るアメンボのお嬢さんに会う。なんて愛らしく、スマートなんだろう。すっかり心を奪われるもんもん。でもアメンボ嬢は凶暴だ。うっかり近づけば鋭い吻でひと刺し、体液を吸われてしまう。それでも忘れられないもんもん。もんもんの想いは通じるのだろうか……。



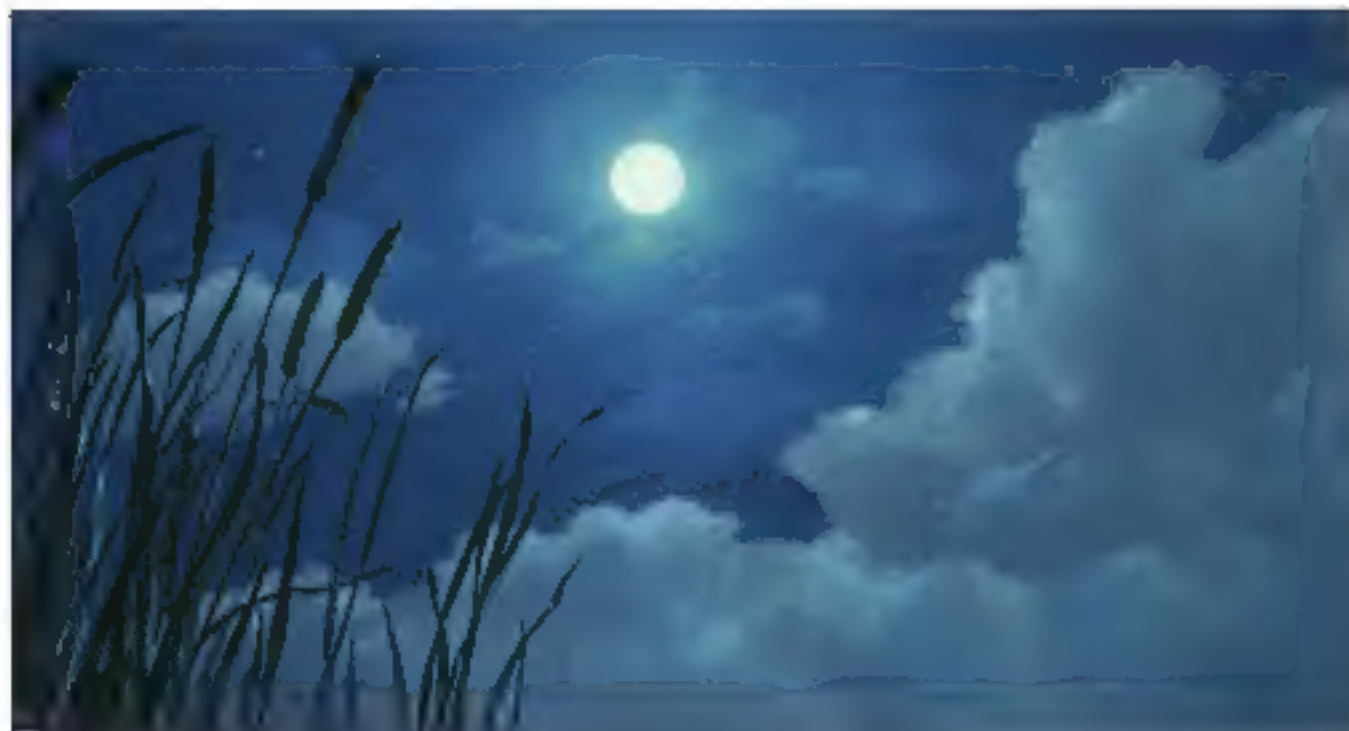


毎日 まいにち もんもんは空気をはこぶ  
水面と泡の家の間を いったりきたり





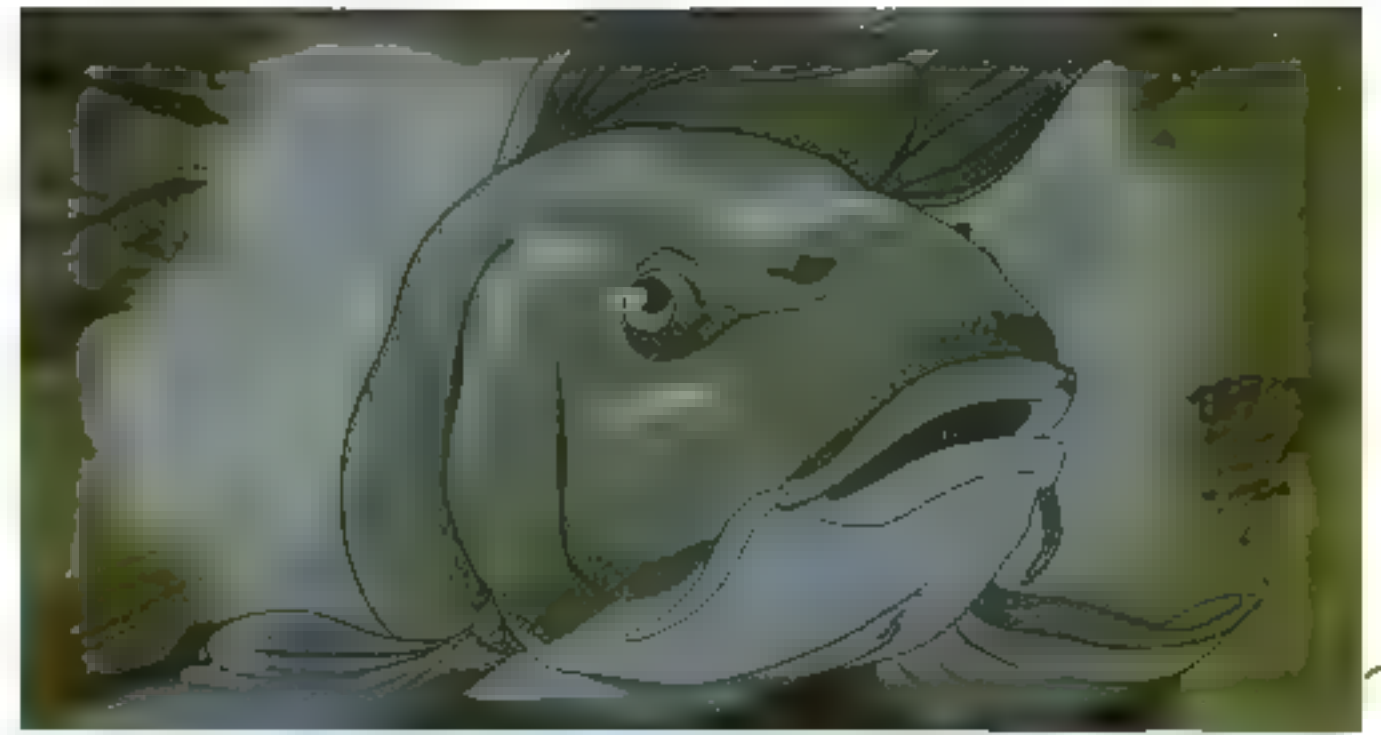
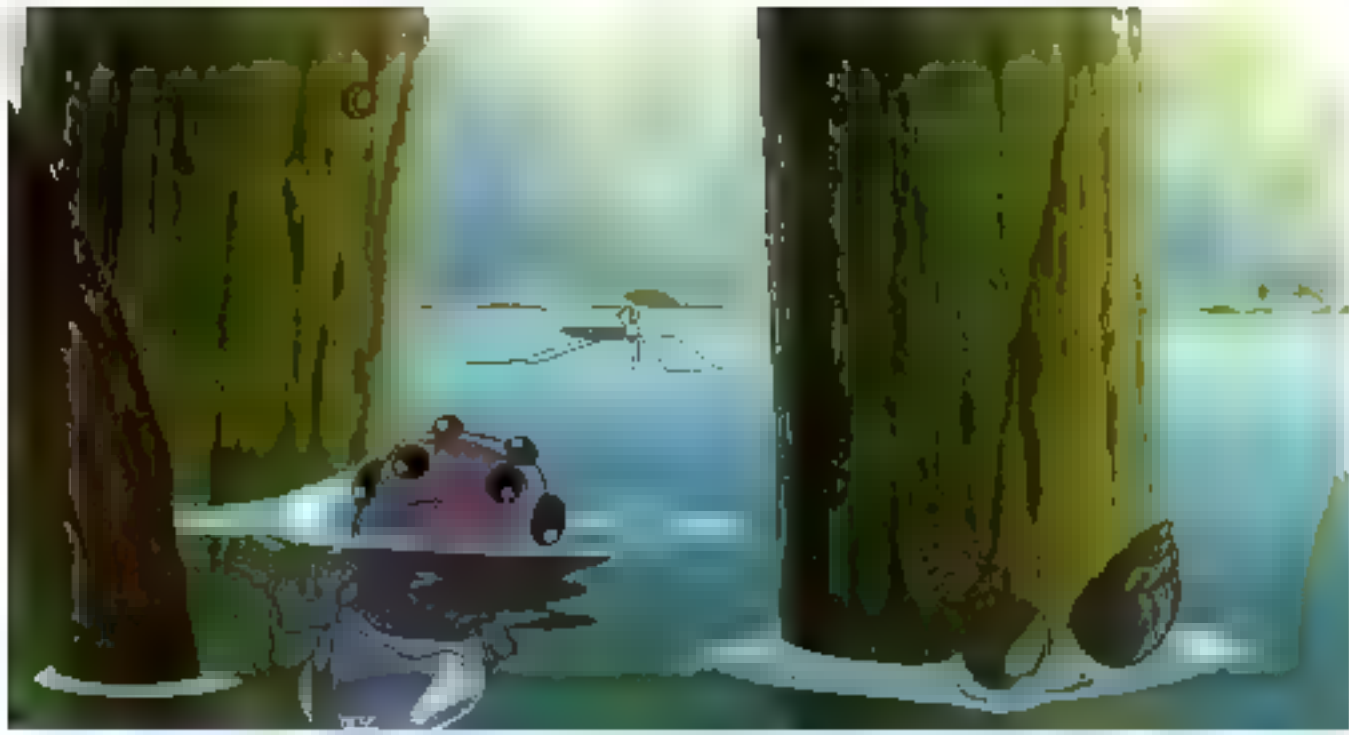
ある日 もんもんは アメンボのお嬢さんとバッタリ会った  
アメンボ嬢は 水面をスイスイ走る  
水グモなんかより ずっと自由でちょっとこわい



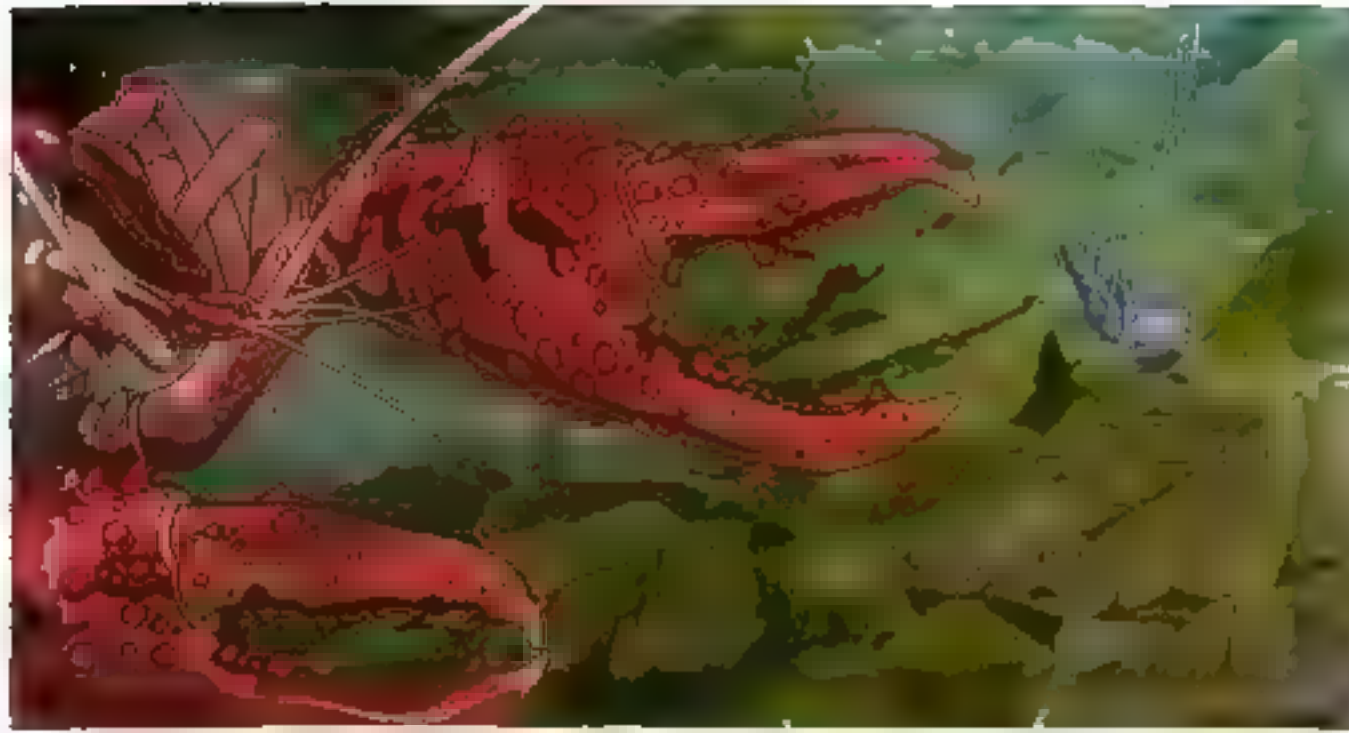
### ひとりぼっちの沼の夜

もんもんは アメンボ嬢が忘れられない  
ぼくも あんなふうに 自由にすべってみたい

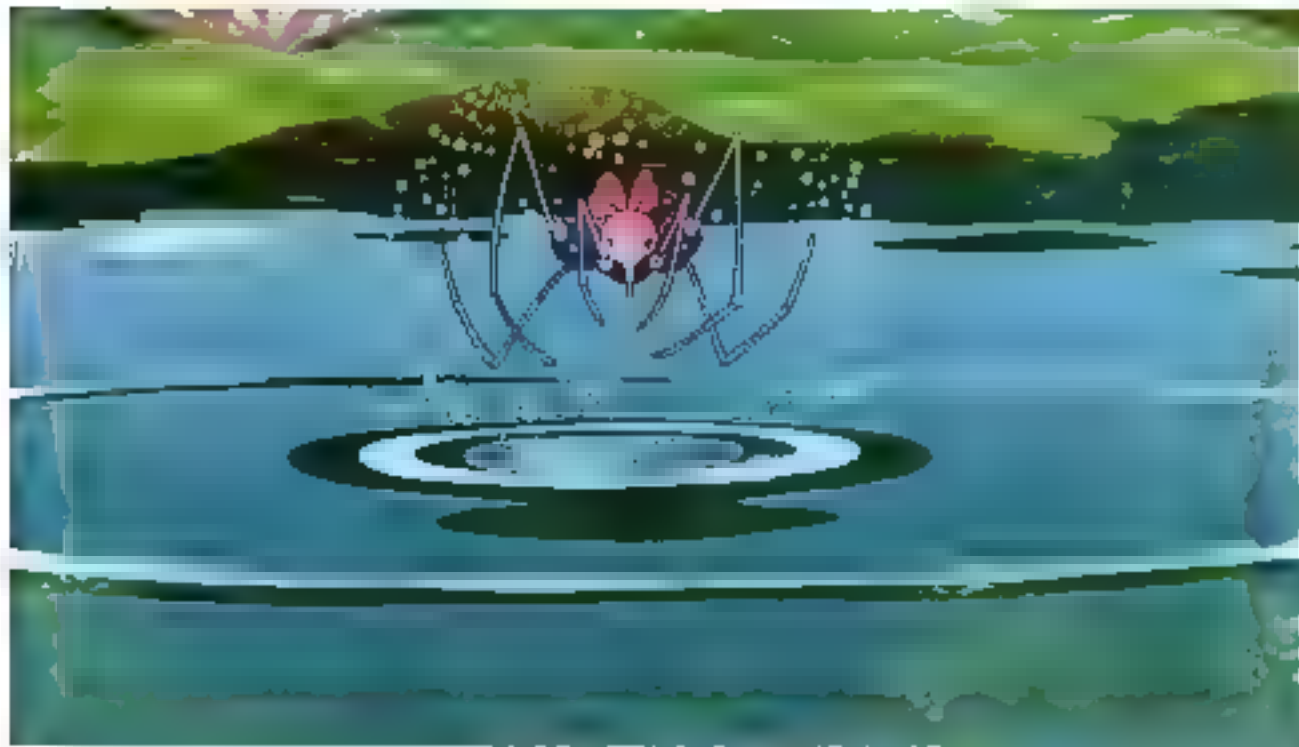




きょうも 沼はいいお天気  
アメンボ嬢は狩に夢中で カゲロウを追いかける  
そこへ 大きな魚が おそいかかった

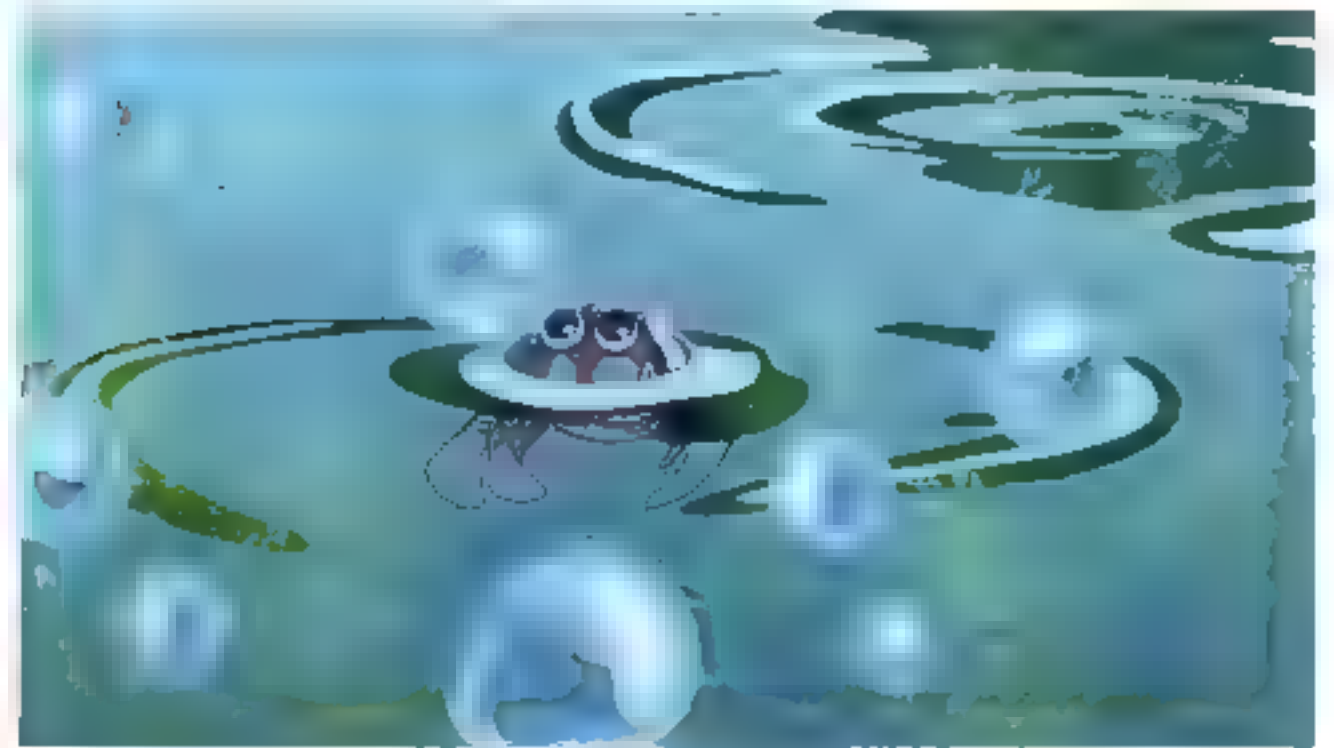
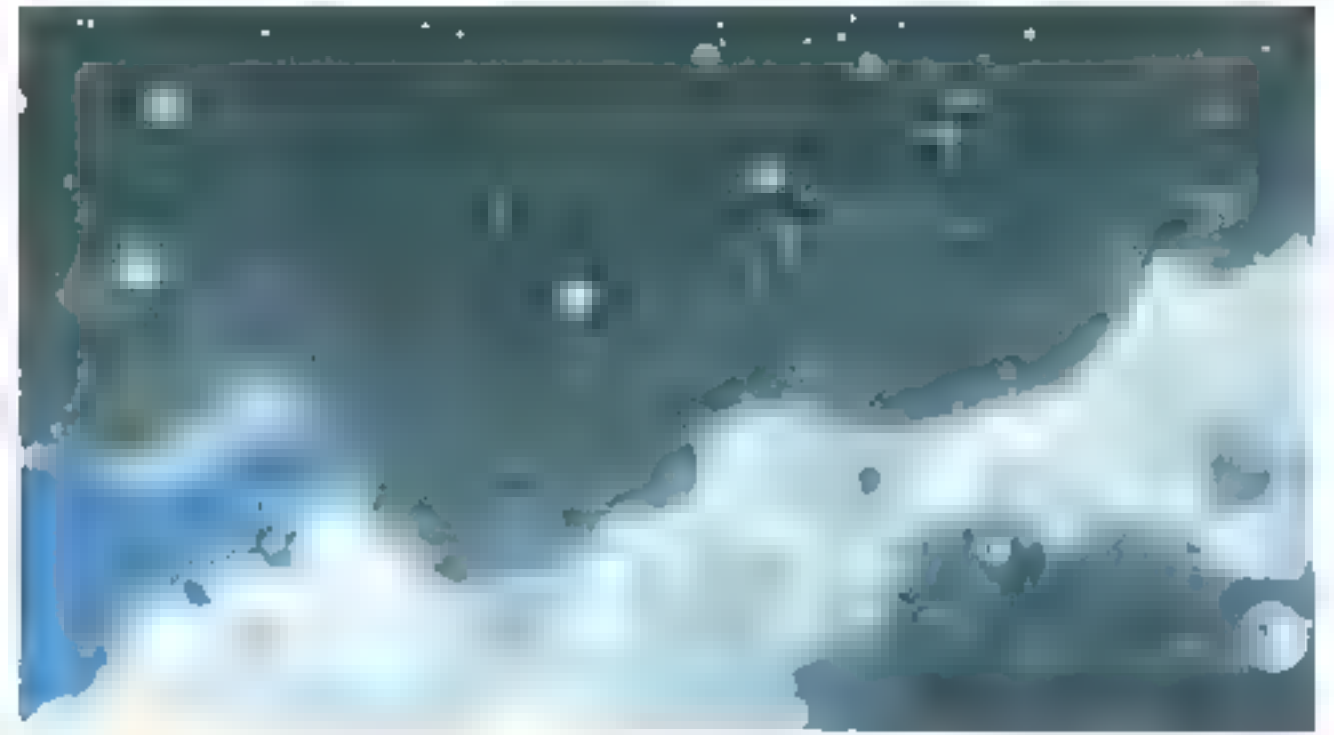


たいへんだ  
アメンボ嬢は気を失って水の中  
もんもんは たすけに泳ぐ  
しっかりして!

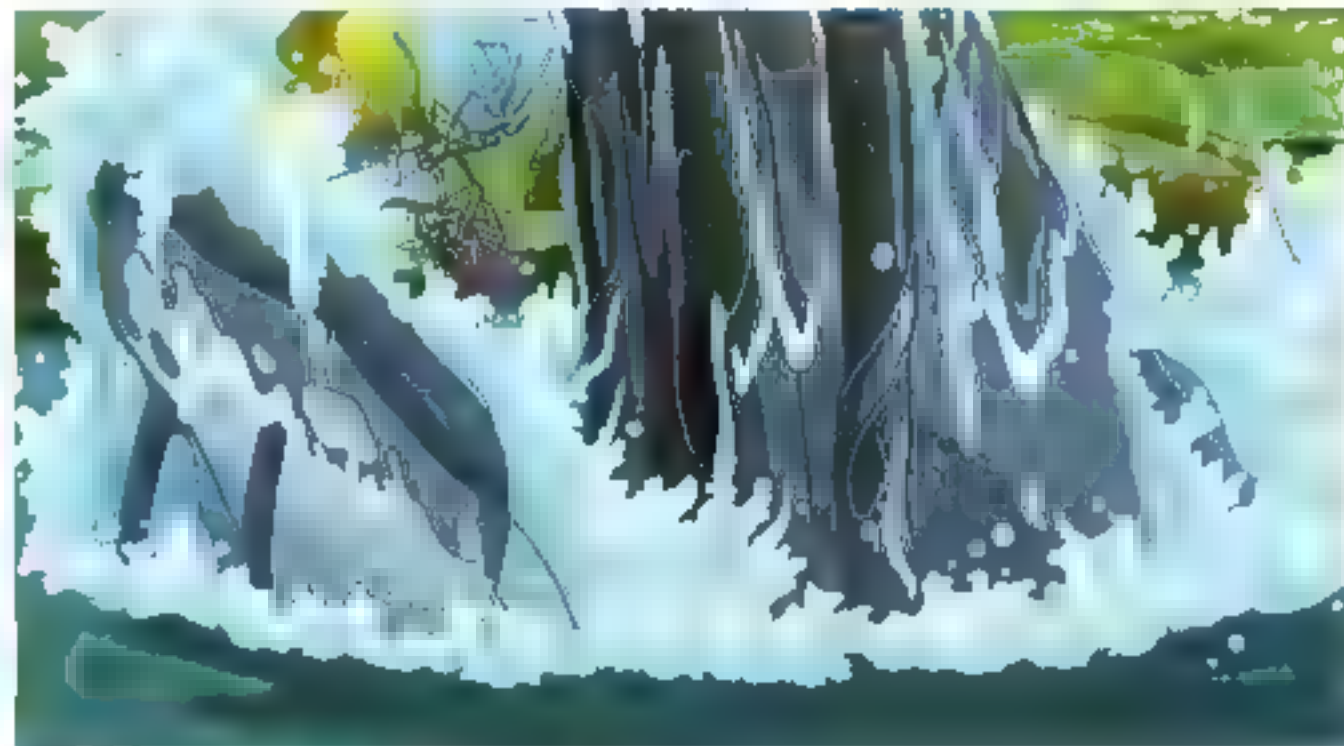
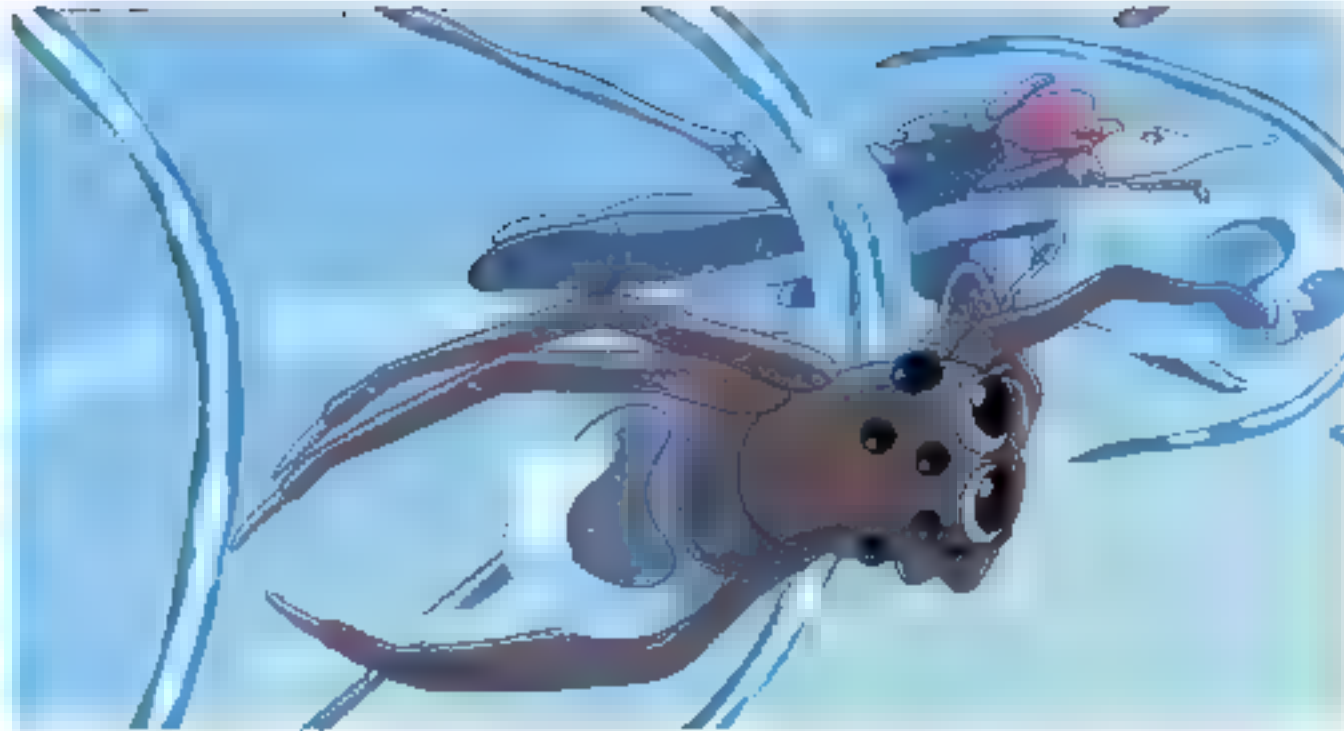
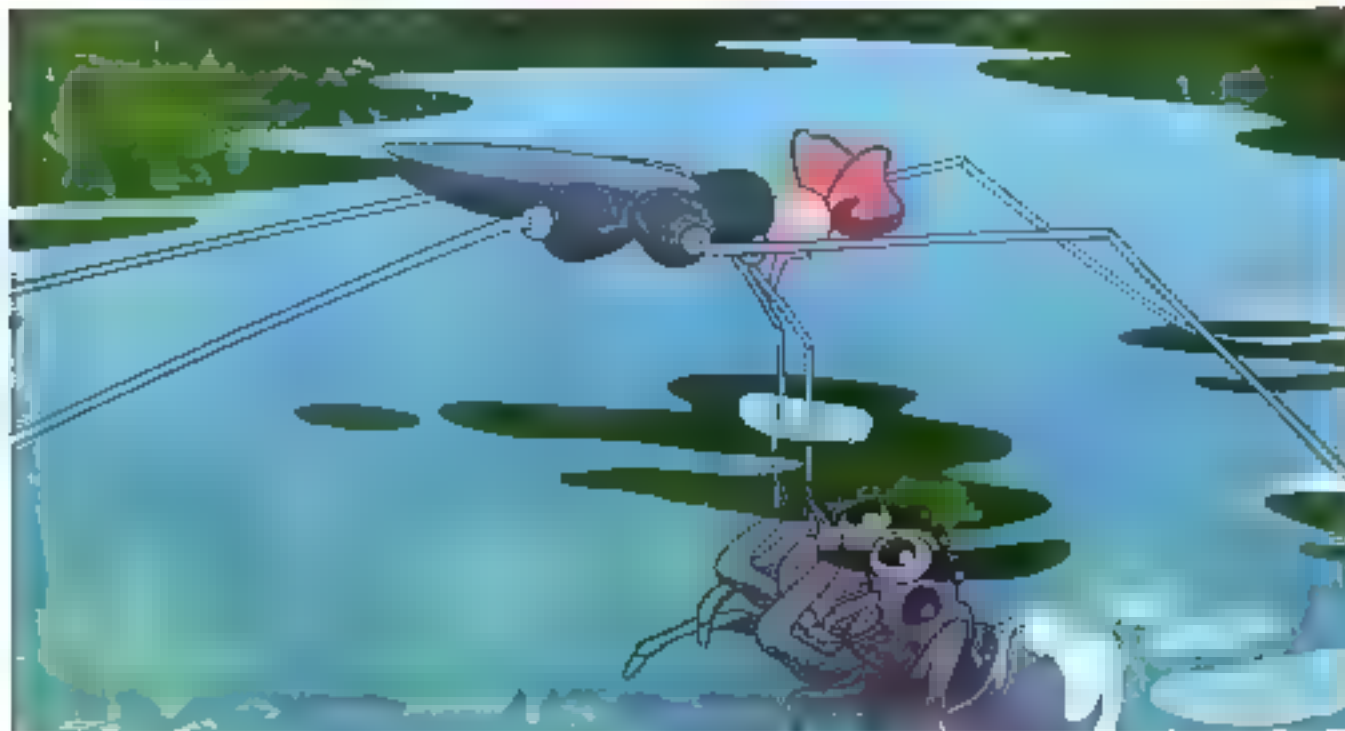


われにかえったアメンボ姫は  
もんもんにびっくり ひとけりして  
あっという間に 行ってしまふ





とりのこされたもんもん  
雨粒が落ちて来て 水柱をたてはじめる  
雨だ・・・



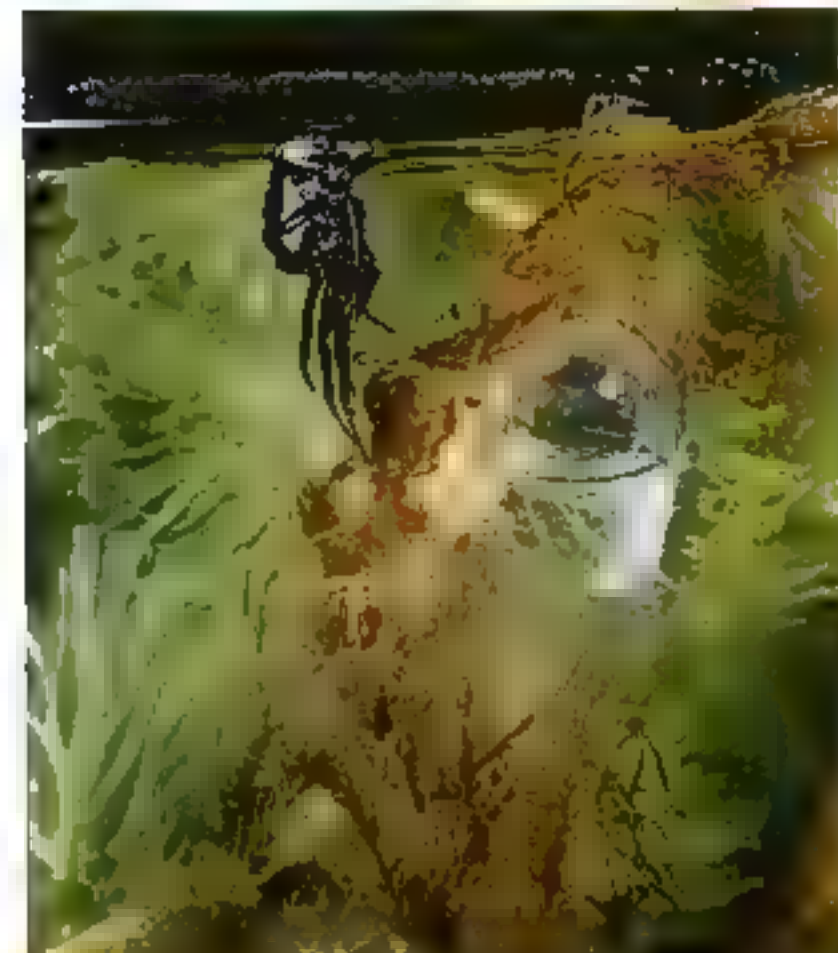
アメンボ嬢は もんもんがたすけてくれたのを知っていた  
水の上と下で 手がむすばれる 夢のようなランデブー  
でも水グモとアメンボは いつまでも一緒にいられない  
さようなら またね



晴日も あざっでも

雨は良い天気

雨と晴の両方あるよ



お尻に空気の泡をつける水がもと水中の葉。頭からお尻の先まで1cmくらいの小さな水がもです。

### もんもんの身体のおひみつ

めはぜんぜん"で"8がある

足は8本 →

手は小さく2本

お尻の穴 糸を出す穴

もんもんはお尻で息をする

泡 / 水がもは、口で息をしません。お腹の下に空気をすう穴があります。どすかち泡をつけていれは"水の中心"で平気なのです。

☆およく"のはハタ  
☆昼はかいていて、夜にイサトリをする

上アゴ"き手のように使い、奥にある下アゴ"とど、イサき"グチヤグチヤ"にして、つば"とませ"てすいます。

イサは自分よりよわいの"おんぞも"

## 矢野 顕子



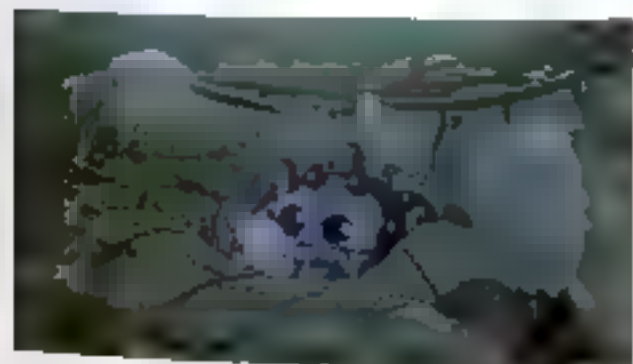
1955年、東京都生まれ。シンガー・ソングライター&ピアニスト。NY在住。76年にアルバム「JAPANESE GIRL」でデビュー。現在までに25枚のアルバムを発表する。81年には「春歌小町」が大ヒット。現在、多数のCM、テレビ番組のテーマ曲を手がけるほか、近年の劇団、ピアノ本で映画音楽を手がけるなど、幅広く活躍する。

この作品から、言葉で表現することの  
便利さに改めて気づかされました。

この作品ではアメンボ嬢と主人公のもんもん、それからミジンコの音を原で表現しています。最初はアメンボ嬢をお願いしますと言われていた中で、まさかもんもんやミジンコまでやるなんて思っていませんでした。少し戸惑いましたね。

作業は宮崎監督の指揮を受けながら、映像を見て、セリフのない虫たちの出す音を制作していくという感じでした。その時に意識したのは宮崎監督の頭の中にある音のイメージにどれだけ近いものを出せるかということでした。でも実際には私が提供した音を聞いて、「あっ、それもいいね」という感じで現場で一躍に作っていたようなところもあります。

普段私は音楽家として、言いたいことを音楽で表現しています。けれど、今回、この仕事をやらせて頂いたことで、実は言葉で表現することがどんなに便利なものか、と改めて感じました。言葉という意思を伝達する手段を断たれた時の自分の



無力さを、実感したんです。

ところで、私は初め、映像を見て男の悲壮感、悲しみが込められた物語だなあと感じながら、もんもんは青年だと思っていたんですね。そうしたら監督が、もんもんは中年のおじさんだって言うじゃないですか。アメンボ嬢ともんもんのどちらの味方になればいいのが、複雑な気持ちになりました。さらに、映画のラストでアメンボ嬢との空中散歩別れた後、もんもんは、またすぐにアメンボ嬢に会えると思っていると説明されてびっくりしました。私がアメンボ嬢だったらこれでいい。楽しかったわって感じなので、ふたりがまた会うなんて思わなかったんです。映像ってこんなにも人によって見方や解釈が違うんだなあと感じました。そんな風に考えていくと、この作品は実際大人の恐の、深い物語なのかもしれません。でも、美術館でこの映画を観る子供達は何を思い、どんな反応をするのかしら。とても気になります。いつか美術館に遊び込んで、大勢の子供達と一緒に観てみたいですね。(談)



## 山瀬 理桜



ヴァイオリニスト&ハルダンゲルヴァイオリニスト。作曲家。新潟県新潟大学音楽学部音楽学科ヴァイオリン科卒業。2000年、CDデビュー。クラシックを基盤に北欧音楽を取り入れた創作も行っている。04年、アルバム「ゴールデン・オーロラ」でメジャーデビュー。ハルダンゲルヴァイオリンの地元ノルウェーで日本人初のハルダンゲルヴァイオリニストとして紹介される。現在、演奏活動や指導を行う。

ハルダンゲルの音色とともに、  
心に残る音楽になると嬉しいです。

日本で北欧音楽はあまり知られていません。私は北欧音楽を学ぶ機会を得て、ノルウェーのハルダンゲルという土地で生まれたヴァイオリンに出会いました。そのヴァイオリンは私たちが知っているヴァイオリンと違い、音に厚みと広がりがあり、温かく懐かしさを感じます。ハルダンゲルヴァイオリンに魅せられて、私はこのヴァイオリンで北欧音楽を日本に広めたいと思いました。そうして地道に活動を続けた結果、2004年4月に「ゴールデン・オーロラ」というCDを出すことが出来ました。収録では、ハルダンゲルヴァイオリンを始め、ヴァイオリンなどすべての音を自分で演奏しました。このCDを宮崎監督が気に入って下さって、「水グモもんもん」の音楽にと声をかけてくれたのです。絵コンテを描きながら聞いて下さったようで、とても光栄です。

■コンテを見た時は、水の中の物語で、水をイメージして作ったアルバム「ゴールデン・オーロラ」との不思議な縁を覚え、とても嬉しく思うのと同時に、私の中で自然と音楽が生まれてくるのを感じました。宮崎監督が映像を見ながら即興的に音楽を作ってほしいとおっしゃったことから、作業は私がラフな映像を見て何曲か作ったものを監督に聞いて頂き、それをもとに監督



ハルダンゲルヴァイオリンは9本の弦を持ち、うち5本は共鳴弦のため、ひとりで2.3人分の音を出せる。

の中にある音楽イメージに近づけていくという私と監督の掛け合いのような形で行われました。その作業の中で、監督は私が持っているいい部分を自然に引き出して下さったように思います。ザリガニのシーンでハラハラする感じの音楽を準備していた私に、もっと悲しい感じの、もんもんの気持ちの音楽を入れてほしいと言われた時は、単純に映像に合った音楽をつけられればいいわけじゃないということを経験させて頂きました。

もんもんには宮崎監督の愛情がいっぱい詰まっています。私も音ひとつひとつに愛情を込めて音楽をつけさせて頂きました。ハルダンゲルの音色とともに、この作品の音楽が心に残るものになったら嬉しいです。(談)

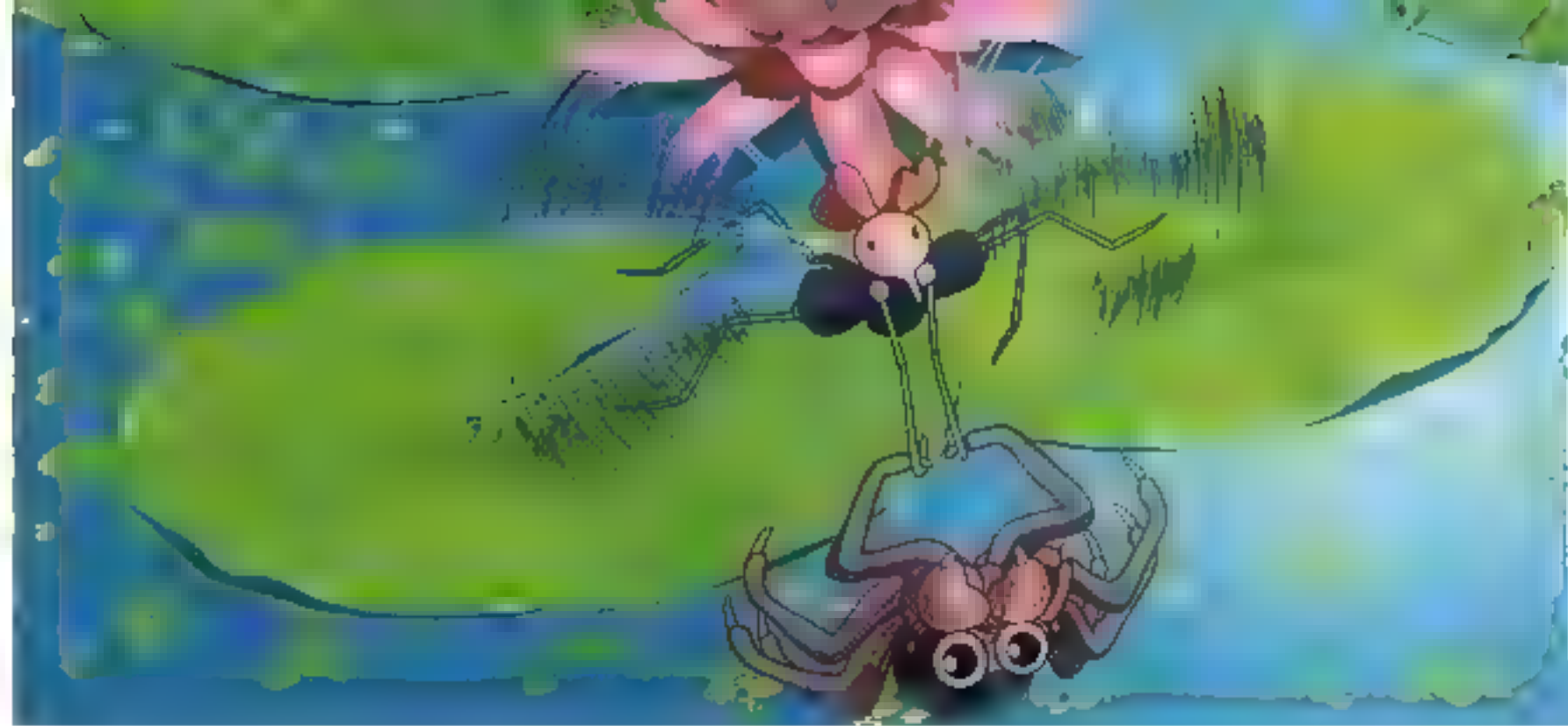


## 田中敦子 (演出アニメーター)

虫のサイズで世界を描く  
その感覚をつかむのに時間がかかりました。

この作品では今までアニメーターとして培ってきたノウハウが見事に役に立ちませんでしたね(笑)。虫のサイズで世界を描くという感覚が私もスタッフもすぐには理解出来なかったんです。いつもの水の描き方で描くと、もんもんの着るみを見た人周りによくなってしまふ。宮崎さんに「ディテールを大きく描け」と教えていただいて、頭でわかっているけど、スタッフ全員これまでの経験で手が自然に人間サイズの波紋や水濁を描いてしまっ、困りました。

それに、それぞれ細のキャラクター個々の出る動きをどうするか。人間と全然違って、もんもん全体全体を使ってオーバーに動かさないと何をしているのかわからない。口が見えないので、怒しい時とうれしい時といつも同じ顔なんです。それで気持ちを表情にうまく表現するのが大変でした。宮崎さんは、アメンボ嬢に



フラれたもんもんがミジンコを食べないのは、失恋して落ち込んでいるからだけでなく、ミジンコにも命があることに気づいて食べられなかったんだと心情を説明してくれましたが、そこまで表現できたかどうか。アメンボ嬢に関しては、水面の走り方は大塚(伸治)さんにとっても助けていただきました。また、とにかく色っぽくというのが宮崎さんの望みでした。でもラッキョウのような頭にリボンをつけたキャラクターをどうしたらかわいく上品に色っぽく見せられるのか…。原画の山下(明彦)さんが頑張って宮崎さんの期待に応えてくれました。

そうしたスタッフに助けられながら、ドキュメンタリー映画「ミクロコスモス」を観たりして、みんなで作品世界をつかんでいきました。実際に水槽にメダカやナマズを飼って観察したりもしました。宮崎さんは、水槽を拡大レンズで覗いて、「これだけって興奮していましたよ(笑)。水草の葉脈に空気が入っているのまで見えて、まさにもんもんの世界なんです。プランクトンや原産の人たちが面白いものをいっぱい楽しみながら描き込んでくれました。撮影の処理でも酔を増やしてくれたりしています。

なんとか完成させることが出来たのも、複雑な作業をこなして下さったスタッフの皆さんのおかげです。ありがたかったです。1度目はお話を観て、2度目はもんもんの水中生活を観て、3度目くらいは皆さんの水中生物を観ると、何度も観て楽しんでもらえたらと思います。(後)

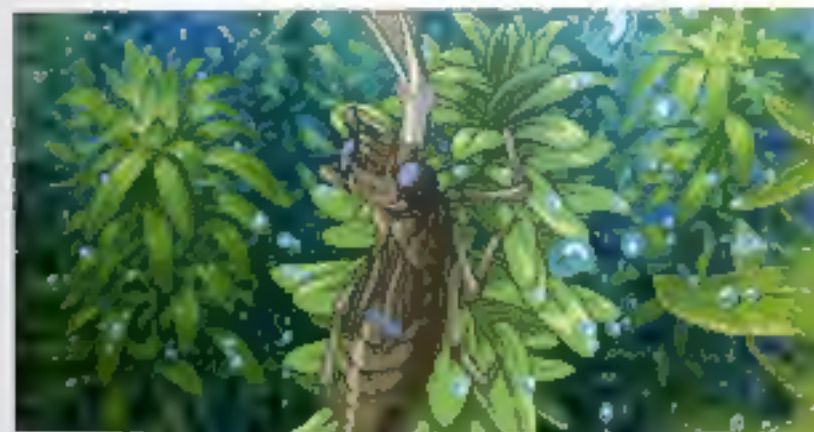
## 渡邊洋一 (美術監督)

なかなか宮崎さんがイメージする  
水中世界をつかめず苦労しました。

絵コンテを読んだ時は、水中ということで大変だなと思いました。美術ボードを描く時には、水の中の世界は、はっきり見える感じとぼけた感じが混じりあっていて、遠くの方は色が溶け込んでいる気がしたので、その感じを絵にするため、紙の上で色同士がスーッと溶け込んで、かつ描き込みの自由度の高い水彩調がいいと思いました。最初に描いたボードは、物語の舞台が少しにこった水の沼ということだったから、水の色をグリーンにしました。水草の色をにこった水に反射させた感じ。宮崎さんはそれを見て、モノトーン気味だから水はブルー、水草の色はグリーンにしようと思いました。色を多彩にしようということになったんです。でもブルーは紙に塗った時いいと思っても、絵の具が乾くと同じ色でも塗りの厚みの違いなどで、思いもしない色になるんです。「水のブルーはきつい色にしないように」と宮崎さんから言われていましたが、うまくいかず苦労しました。しかも水草の多い背景は、どうしても水草のグリーンに引っ張られて全体がグリーンに見えてしまうんです。また、宮崎さんに「華やかな感じに」とか、「暗くしすぎないように」とも言われました。水中には、光源当たっているところはすごく綺麗なのに、ちょっと深みに入ると曇り

暗で怖いというイメージもあるので、悩みました。上映される土曜日は子供達がホッとできる映画を観てもらうために作られた映画館です。その場にも、もんもんのキャラクターにも合うようなリアリティがあって、でも少し漫画っぽい、そんな背景にしたいという気持ちで、絵作りをしました。また、宮崎さんから虫の目になって水中世界を描くという大きな課題も与えられていましたし、方向が決まるまでにずいぶん時間がかかってしまいました。

美術部では、水槽に池の土や水草を入れて観察しました。その水槽から、水草の形態や水草の葉っぱが揺れる中でねじれながらゆらいたりするのが確認できました。また、光が葉っぱを透かす様子もわかりました。光の透け具合によって絵の雰囲気が大きく変わりますから、光の雰囲気や射し込み方は背景を描く時にかなり意識しましたが、なかなかニュアンスを伝えることができず、スタッフに迷惑をかけたかもしれません。多くの方に助けて頂き、作業を進めることができました。本当に感謝しています。この作品の美術監督をやらせて頂いて、多くのことを学びました。そしてこの作品を見てくれた子供達が喜んでくれることを願っています。(談)



## 奥井 敦 (映像演出)

**撮影部の仕事は、  
最後に入れる映像の隠し味。**

この作品の中で描かれる水中はミクロの世界です。人間の目で見た状態の水中ではなく、接写レンズやルーペを通して水中を見た感じの世界。その感じを背景や作画スタッフが描いたものにちょっと処理を加えようというのが今回の撮影部のひとつの大きな仕事でした。接写の世界はピントが合っているところってすごく限られています。接写レンズで水グモを追うと、ピントは水グモには合っているけど、その周りはぼけている。その感じをそのままこの作品で再現しただけではアニメーション映画として盛り立ちません。ですから水中シーンに関しては、ピントとボケをいかにコントロールするかが課題になりました。そこで、基本的な画面設計は従来どおりに進めておいて、撮影時に各シーンの内容、ニュアンスに合わせて調整することにしました。基本的には、セルアニメーションの時に行っていたマルチプレーン撮影(背景やセルを実際に画面をおいて配置し、撮影する手法。ピントがあっているもの以外は画面により自然にぼける。通常はすべての素材を蓄積させて撮影する)をコンピューター上で再現することをベースにしますが、対象となる素材は背景にすべて描き込まれているので、それを分ける作業から始めます。手前に描かれた水草、その奥にあるもの、その他に細かく分けてからセル素材を含めて再配置したうえで、ピントのコントロールをしたんです。水中シーンに関しては、そういった作業をほとんど全カットやりました。カッ

トによってはピントを合わせる位置が微妙で、時間がかかりましたね。それから宮崎さんに「画面全体にフィルターがかかっているような、水中で光が散乱して馴染んでいるような感じが欲しい」と言われたので、そういう処理も加えています。あとは水草に光が当たってキラキラしているのが、水面から光の筋が射して動いているというような処理も行いました。背景に描かれているハイライト部分にちょっと動きをつけて、その部分を少しぼかすと、明るいところが強調されてキラッと光るんです。そうすることで水中世界に奥行きと光の変化を出すことが出来ました。■単に言うとう画面の中のライティングを部分的に強調したという感じですね。その他、水中に浮遊物を足したりもしました。画面により生命感が出ると思ったんです。雨のシーンでは水面に広がる波紋の増幅配置もしました。

撮影部の仕事は、最後に隠し味を入れる「味の素」だと宮崎さんが言っていました(笑)。その通りだと思います。それにしてももんもんの報われない恐の物語にはグッとくるものがありましたね。僕は水辺にはえている植物の影からアメンボ蝶を見ている健気なもんもんが気に入っています。もんもんの気持ちになってミクロの世界を体感してもらえたら嬉しいです。(編)



スタジオジブリ・マンマユート団 提携作品

<声の出演>

矢野龍子

<スタッフ>

原作・脚本・監督

宮崎 駿

音楽

山崎理樹

制作

スタジオジブリ

プロデューサー

鈴木敏夫

演出アニメーター

田中敦子

原画

山下明彦

芳尾英明

鈴木麻紀子

米林宏基

佐藤雅子

二木真希子

大塚伸治

動画チェック

鶴野仁美

動画

手島晶子

中込利恵

大村まゆみ

坂野方子

斎藤昌哉

藤井香織

アレキサンドラ・コエラウフ

大橋 実

笹川周子

石角安沙美

檜垣 恵

室井原雄

三浦智子

西戸スミエ

横田真代子

土岐弥生

椎名律子

大谷久美子

富沢恵子

大友康子

藤森まや

矢地久子

山浦由加里

金子由紀江

菅原隆人

中西雅美

中里 舞

小山正清

福井理恵

谷平久美子

岩上由武

塚本 歩

小野寺香奈

石井邦俊

竹上充知子

三谷輔之

伊藤かおり

西河広美

動画協力

アニメトロロ

中村プロダクション

動画工房

たくらんけ

美術監督

渡邊洋一

背景

田中直哉

春日井直美

伊奈涼子

堀山 修

吉田 昇

デジタル特効

糸川敬子

色彩設計  
デジタルペイント

保田道世  
高柳加奈子  
山田和子  
藤岡陽子

森奈純美  
古城理恵

沼崎富美子  
高橋広美

石井裕章  
黒倉 西

デジタル作画監督  
デジタル作画

片津満則  
佐藤美樹

石塚直子

樹内 進

三好紀恵

CGエンジニア

井上雅史

映像演出

奥井 敦

デジタル撮影

飯田順二

高橋わたる

田村 淳

サウンドデザイン  
アシスタントエンジニア

染谷和孝  
貞安克久

長谷川利里

録音スタジオ

ソニーPCL

東京テレビセンター

デジタルサーカス

音響制作

ソニーPCL

音響制作マネージメント

池崎千鳥

ポストプロダクション

古城 環

キャスティング

堀城和実

レコーディングエンジニア

大野俊彦

杉山オサム

アシスタントエンジニア

橋本剛樹

板橋聖志

音楽編集

大野直子

演奏

山崎理樹(ハルダンゲルヴァイオリン、ヴァイオリン)

城 綾乃(ピアノ、キーボード)

音楽収録

ソニー・ミュージックスタジオ

スタジオインバクト下井草

音楽制作マネージメント

長井 孝

音楽制作

スタジオジブリ

津司紀子

編集

松原理恵

瀬山武司

制作担当

龍澤宏行

制作デスク

神村 薫

望月雄一郎

制作進行

伊藤郷平

演出助手

清川良介

現像

IMAGICA

タイミング

フィルム・レコーディング

カラー・マネジメント・システム

ラボ・コーディネート

平林弘明

本間政弘

松本 渉

志村由布子



© 2006 二馬力・MG



発行日：2005年1月1日初刷 2008年9月30日第2刷 発行人：中島清文 発行所：財団法人徳間記念アニメーション文化財団 東京都三鷹市下基谷1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館  
 編集：多西千鶴子 デザイン：原 美穂子、矢島 洋（東宝アート株式会社） 編集担当：高井亮子、三好 寛 編集協力：安西香月 水ゴモ資料：小野麗嗣（国立科学博物館）  
 協力：株式会社スタジオジブリ 印刷・製本：図書印刷株式会社 定価 400円（税込）

TMCFA-D20 (400)



4 571101 919318

